第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

1．教育学部研究実験棟B棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区　吉田構内H・I・J-18・19区

調査面積　約80㎡（予備発掘調査20㎡、立会調査60㎡）

調査期間　予備発掘調査　平成22年7月20～28日
立会調査　平成23年1月28日、2月4・7・10・15・21・23日、3月4・7日

調査担当　田畑直彦・松浦暢昌

調査結果

（1）調査の経緯（図4・5）

吉田構内において、教育学部研究実験棟B棟（現：教育学部C棟）の改修工事が決定し、設備改修や環境整備に伴う掘削工事が行われることになった。研究実験棟周辺においては、これまでほとんど調査が行われておらず、地下の状況に不明な点が多い。以上の点を踏まえ、平成21年度第13回埋蔵文化財資料館専門委員会（3月23日開催）において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、工事の詳細が決定後、館長、副館長及び埋蔵文化財資料館職員で検討の上、館長裁量で調査区分を決定することとなった。その後、A～Dの4箇所で外灯設置工事が計画されたため、上記4箇所について予備発掘調査、その他の箇所（E～W地点）については立会調査を実施することになった。

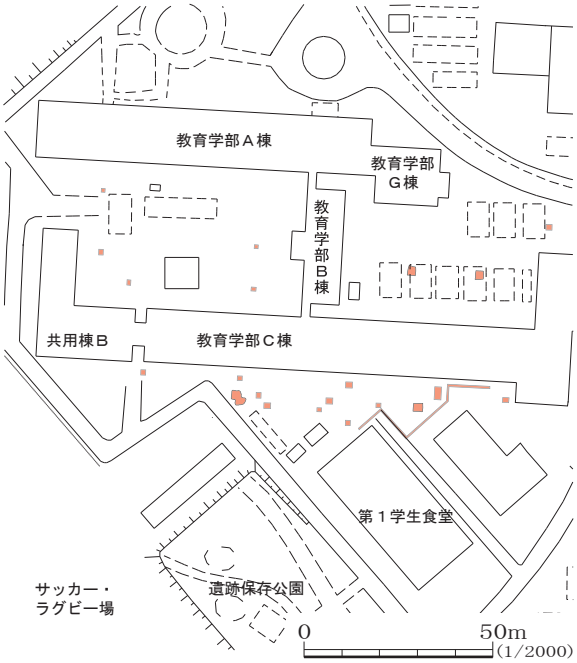


図４　調査区位置図

写真７　Ａ・Ｂ調査区調査前全景（西から）

写真８　Ｃ調査区調査前全景（南東から）

（2）A～E調査区（図6～9、写真7～17）

a.基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層：表土（層厚約6～30㎝）

第2層：造成土（第3・4層のブロック土でガレキを多量に含む：層厚約27～74㎝）

第3層：旧耕土(層厚約20㎝)

第4層：旧床土(層厚約5～10㎝)

第5層：遺物包含層か（C調査区のみ　層厚約6～16㎝）

第6層：地山（弥生時代以降の遺構面形成層で縄文時代以前の河川堆積土　シルト・粗砂・粘土の互層）

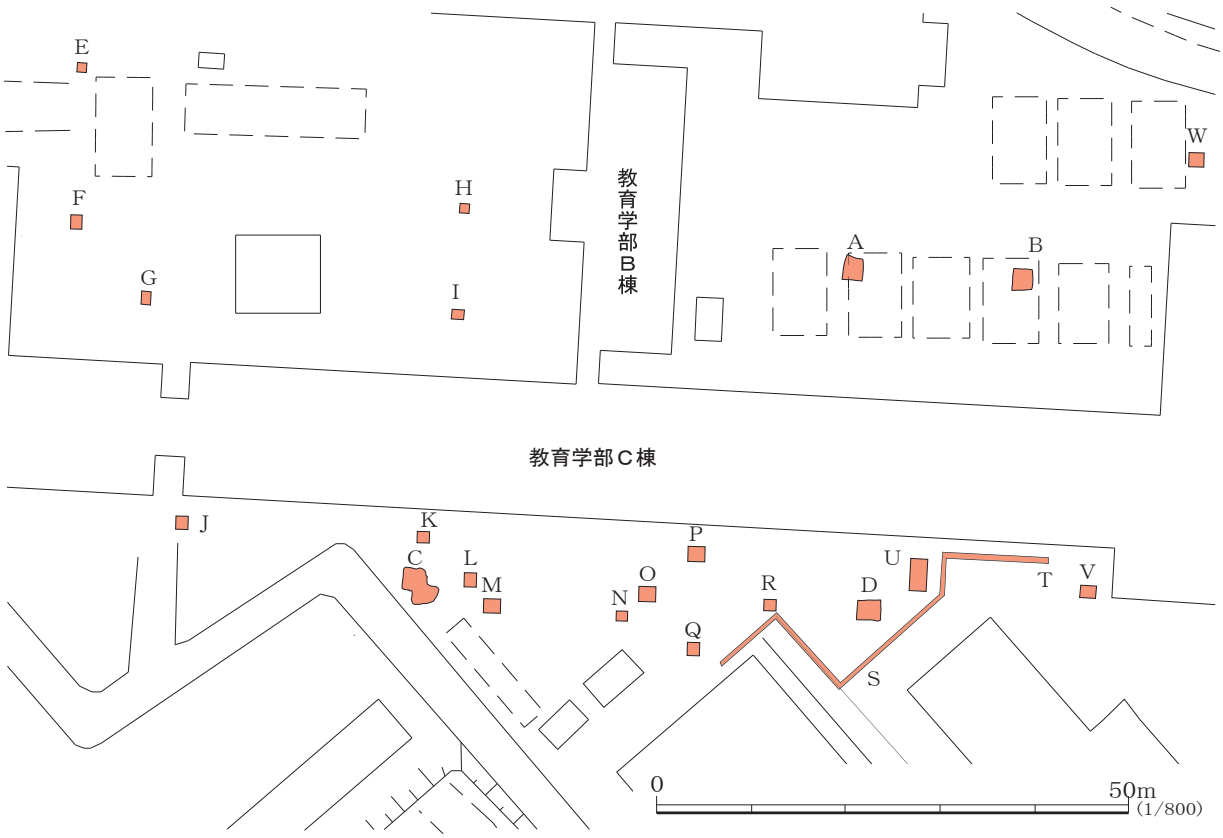


図５　調査区詳細図

Ａ調査区の層序は、現地表下約55～60cmまでが第2層で、以下、約60～80cmまでが第3層、約70～80cmまでが第4層、約80cm、標高19.6m以下が第6層であった。

Ｂ調査区の層序は、現地表下約56～70cmまでが第2層で、以下、約56～74cmまでが第3層、約70cm、標高18.7m以下が第6層であった。

Ｃ調査区の層序は、現地表下約48～77cmまでが第1・2層で、以下、約48～57cmまでが第3層、約55～84cmまでが第4層、約60～79cmまでが第5層（5－1層）、約65cm、標高18.66m以下が第6層であった。第5－1層から遺物は出土していないが、遺物包含層の可能性が高い。

Ｄ調査区の層序は、現地表下約76～89cmまでが第1・2層で、以下、約76～96cmまでが第3層、約92～116cmまでが第4層、約100cm、標高18.7m以下が第6層であった。 なお、第6層は縄文時代以前の河川堆積層と考えられるが、今回いずれの調査区からも遺物は出土しなかった。

b.遺構

Ａ調査区の第6層上面はオリーブ灰色（10Y6/2)シルト、Ｂ調査区の第6層上面は灰オリーブ色（5Y6/2)シルト・オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルトであり、いずれも過去の調査から弥生時代以降の遺構面と考えられる層であるが、遺構は皆無であった。

Ｃ調査区では、第5－1層を検出面としてSX1、SD1を検出し、SX1b層・第6－12層を検出面としてSX2を検出した。なお、第5－1層と遺構埋土との識別が困難であったため、遺構はやや掘り下げた状態で検出した。

SX1の検出幅は約170cm、検出長は約270cm、西側壁面における深さが約40cm、最深部が約58cmを測る。調査区外に広がっているため、規模は不明である。緩やかに北側に落ち込む断面形状から、自然河川もしくは自然地形の落ち込みである可能性が高い。掘削を行った調査区西北隅ではa～fの6層か

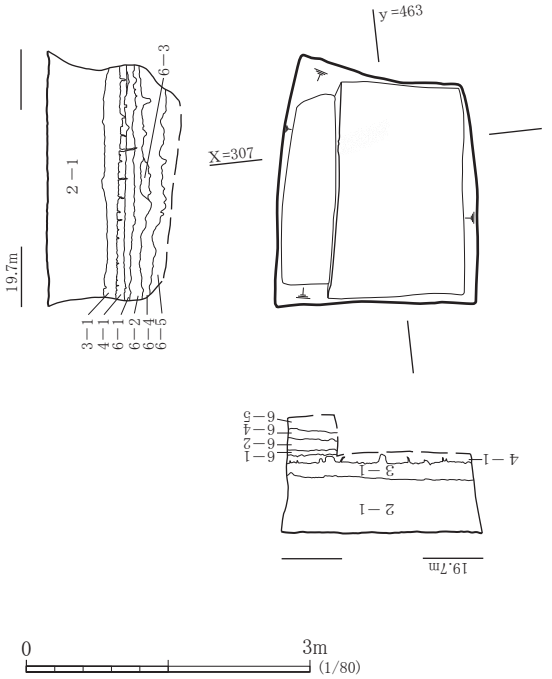


図６　Ａ調査区平面図・断面図

2－1　造成土　灰オリーブ色（5Y6/2）土
～10cm大のバラス含む
2－2　造成土　明黄褐色（10YR7/6）シルト　黄色（5Y7/6）シルト、3－１をブロック状に含む
3－1　旧水田耕土　灰色（5Y4/1）シルト　～１cm大の礫を含む
4－1　旧床土　灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト
6－1　地山　オリーブ灰色（10Y6/2）シルト　～５cm大の礫を含む。
6－2　地山　オリーブ灰色（5GY6/1）シルト　～５cm大の礫を含む。
6－3　地山　オリーブ灰色（5GY6/1）粗砂　～１cm大の礫を含む。
6－4　地山　オリーブ灰色（5GY6/1）シルト　オリーブ色（5Y5/6）シルトを斑状に含む
6－5　地山　オリーブ灰色（5GY6/1）シルト　青灰色（5B5/1）シルトを斑状に含む
6－6　地山　灰オリーブ色（5Y6/2）シルト
6－7　地山　オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト　粗砂、～１cm大の礫を多く含む
6－8　地山　青灰色（5B5/1）粗砂　～５cm大の礫を多く含む
6－9　地山　青灰色（5B5/1）シルト　6－10を斑状に含む
6－10　地山　オリーブ色（5Y5/6）粘質土　6－9を斑状に含む
6－11　地山　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土

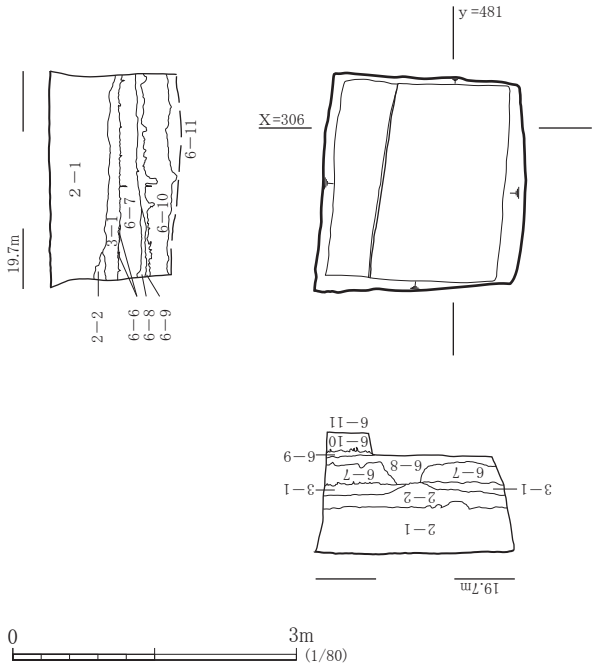
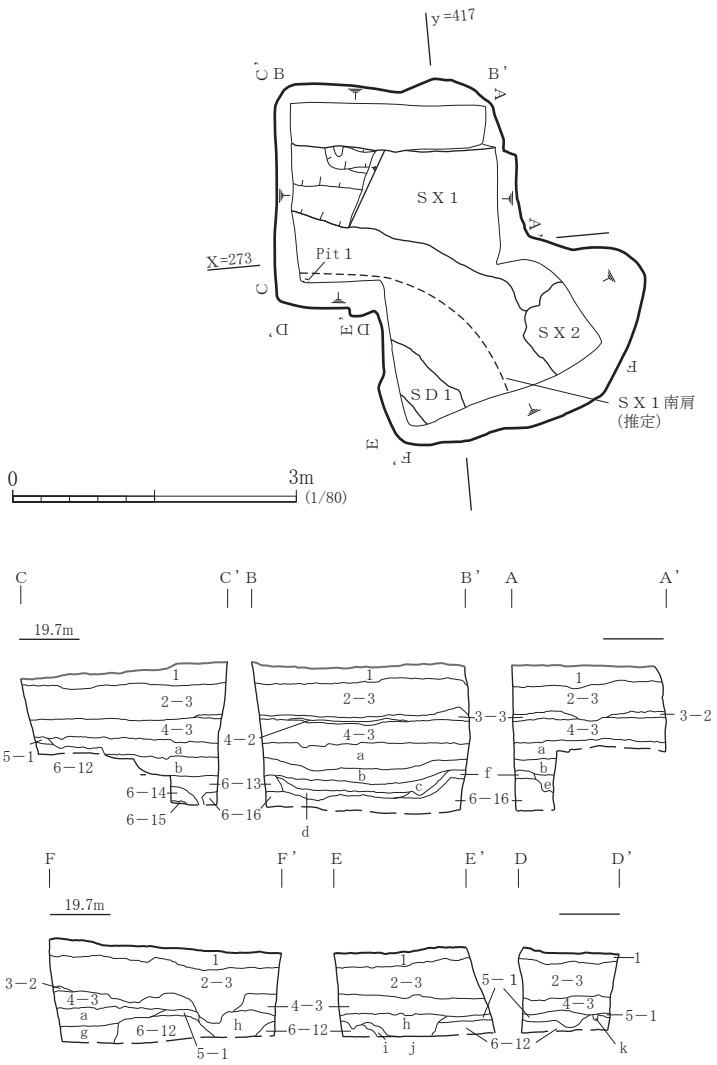


図７　Ｂ調査区平面図・断面図

写真９　Ａ調査区西壁土層断面（北東から）

らなることを確認した。いずれも黒褐色もしくは黒色のシルト層であり、このうち、a･b層から弥生時代中期後半の土器片（図10－1～10）、が出土した。SD1･SX2は黒褐色（10YR3/1）シルトを埋土とし、深さは20cm以上である。いずれも調査区外に広がっているため詳細は不明である。また、掘削を一部にとどめたこともあり、遺物は出土しなかった。Pit1は壁面（D－D’断面）で確認した。直径5cm、深さ6cmを測る。遺物は出土しなかった。

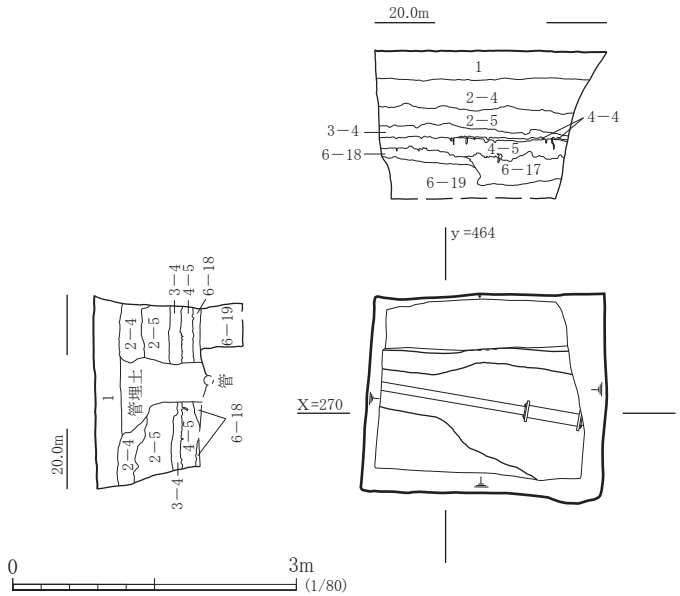
D調査区の第6層上面は褐灰色（10YR4/1）シルト･灰オリーブ色（7.5Y6/2）シルトで、弥生時代以降の遺構面と考えられる層であるが、既存の排水管による攪乱が顕著であり、遺構は皆無であった。



1　表土　マサ土
2－3　造成土　灰オリーブ（5Y5/2）色土
3－2　旧耕土　オリーブ灰色（2.5GY6/1)シルト
3－3　旧耕土　緑灰色（7.5GY5/1）シルト
4－2　旧床土　オリーブ黄色（7.5Y6/3)シルト
4－3　旧床土　オリーブ黄色（7.5Y6/3)シルト　5をブロック状に含む
5－1　遺物包含層　6－12に灰色（5Y5/1)シルト、黒褐色（10YR3/1）シルトを斑状に含む
6－12　地山　オリーブ黄色（5Y6/3)シルト
6－13　地山　灰色（N5/0)シルト
6－14　地山　暗灰色（N3/0）粘質土
6－15　地山　灰色（N4/0）粗砂
6－16　地山　灰色（N4/0）粗砂に明オリーブ灰色（2.5GY7/1）・オリーブ灰色（2.5GY5/1)粗砂・～５cm大の礫を含む

遺構埋土
a SX1埋土 黒褐色（10YR2/1)シルト　～6cm大の礫・炭を含む
b SX1埋土 黒褐色（10YR3/2）シルト ～4cm大の礫・炭を含む
c SX1埋土 黒褐色（2.5Y3/1）シルト ～4cm大の礫・炭を含む・粘性大
d SX1埋土 黒色（10YR2/1)粘質土　炭含む
e SX1埋土 黄灰色（2.5Y4/1）シルト
f SX1埋土 灰色（N5/0)シルトにcを斑状に含む
g SX2埋土 黒褐色（10YR3/1）シルト　6－12、～2cm大礫・炭を含む
h SD1埋土　gと同じ
i SD1埋土　6－12に黒褐色（10YR3/1)シルトをブロック状に含む
j SD1埋土　暗灰色（N3/0)シルト
k Pit1埋土　灰色(5Y5/1）シルト、黒褐色（10YR3/1）シルトのブロック土　6－12を少量含む

図８　Ｃ調査区平面図・断面図



1　表土（マサ土）
2－4　造成土　１とコンクリート・バラス
2－5　造成土　　3－4・4－4のブロック土
3－4　耕土　灰色（5Y5/1)シルト
4－4　床土　灰オリーブ色（5Y5/2)シルト
4－5　床土　オリーブ黄色（5Y5/3)シルト
6－17　地山　褐灰色（10YR4/1)シルト　～５cm大の礫含む
6－18　地山　灰オリーブ色（7.5Y6/2)シルト　粗砂・～1cm大の礫を含む
6－19　地山　灰色（10Y5/1)粗砂　下部では6－18をブロック状に含む

図９　Ｄ調査区平面図・断面図

写真10　Ｂ調査区西壁土層断面（北東から）

写真11　Ｃ調査区全景（東から）

写真12　Ｃ調査区東壁土層断面（西から）

写真13　Ｃ調査区北壁土層断面（南西から）

写真14　Ｃ調査区西壁土層断面（東から）

写真15　Ｃ調査区東壁土層断面（西から）

写真16　Ｄ調査区全景（南から）

写真17　Ｄ調査区東壁（西から）

（3）E～W地点（図5、写真18～25）

E～W地点は雨水枡（E～R・U～W地点）及びU字側溝（S・T地点）設置箇所である。E地点は現地表下約63㎝まで掘削したが、既設管の真上に設置されたため埋土はすべて造成土であった。F地点は現地表下約57㎝までが造成土で、約57～80㎝で旧水田耕土を確認した。G地点は現地表下約103㎝まで掘削したが埋土は全て造成土であった。H地点は現地表下約82㎝まで掘削したが、埋土は全て造成土であった。I地点は現地表下約73㎝までが造成土で、以下約73～78㎝が旧水田耕土、約78～82㎝が旧水田床土、約82～90㎝が弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ黄色（7.5Y6/3)シルトであった。また同シルトを検出面としてピット4基を検出した。ピットの埋土はオリーブ黒色（5Y3/1）シルトで、深さは5～7㎝であった。遺物は出土していない。

J地点は現地表下約90㎝まで掘削したが、埋土は全て造成土であった。K地点は現地表下約100㎝まで掘削したが、埋土は全て造成土であった。L地点は現地表下約42㎝までが造成土、約42～61㎝が旧水田耕土、約61～81㎝が旧水田床土、約61～98㎝が遺物包含層もしくは遺構埋土と考えられる黒褐色（10YR3/1)シルト、約98～126㎝が弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトであった。黒褐色シルトは東から西へ緩やかに傾斜して堆積している。M地点は現地表下約58㎝までが造成土、約58～71㎝が旧水田耕土、約71～80㎝が旧水田床土、約80～92㎝が黒褐色（10YR3/1）シルト、約92～123㎝が弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ灰色（2.5GY6/1）シルトであった。黒褐色シルトはL地点同様、東から西へ傾斜して堆積しており、摩滅した弥生土器片が出土した。

N地点は現地表下約75㎝までが造成土、約75～94㎝が旧水田床土、約94～106㎝が遺物包含層もしくは遺構埋土と考えられる黒褐色（10YR3/1）シルト、約106～139㎝が弥生時代以降の遺構面形成層である緑灰色（5G6/1)シルトであった。黒褐色シルトからは、弥生土器高坏脚部（図10-10）が出土した。O地点は現地表下約115㎝まで掘削したが埋土は全て造成土であった。P地点は現地表下約88㎝まで掘削したが、埋土は全て造成土で、床面で旧水田床土を検出した。Q地点は現地表下約90㎝まで掘削したが埋土は全て造成土であった。R地点は現地表下約120㎝まで掘削したが埋土は全て造成土であった。S地点は現地表下約64㎝までが造成土で、約64～80㎝で遺物包含層もしくは遺構埋土と考えられる黒褐色（10YR3/1）シルトを検出した。黒褐色シルトは幅約2mの範囲で残存していたが、周辺はすべて造成土の範囲内であった。T地点は現地表下約47㎝までが造成土で、約47～57㎝が旧水田床土、約57～83㎝が弥生時代以降の遺構面形成層である明黄褐色（2.5Y7/6）シルトであった。U地点は現地表下約90㎝までが造成土で、約90～97㎝が旧水田床土、約97～140㎝が弥生時代以降の遺構面形成層であるオリーブ灰色（10Y6/2)シルトで、一部では緑灰色（7.5GY6/1)粗砂、明黄褐色（2.5Y6/8）シルトであった。V地点は現地表下約63㎝までが造成土であった。以下、約63～93㎝は弥生時代以降の遺構面形成層である緑灰色（7.5GY6/1)シルトであり、同層を検出面とした黒褐色（2.5Y3/1）シルトの落ち込みを検出した。遺物は出土していない。また現地表下約93㎝の床面では黄灰色（2.5Y5/1)粗砂を検出した。同層は縄文時代以前の河川堆積層と考えられる。

W地点は現地表下約39㎝までが造成土で、約39～56㎝が旧水田耕土、約56～59㎝が旧水田床土であった。以下、約59～77㎝が弥生時代以降の遺構面形成層である灰オリーブ色（7.5Y6/2)シルト、約77～89㎝がオリーブ灰色（5GY6/1）シルト、約89～107㎝が灰色（10Y5/1）シルトで、いずれも縄文時代以前の河川堆積層と考えられる。

写真18　Ｉ地点土層断面（西から）

写真19　Ｌ地点土層断面（南から）

写真20　Ｍ地点土層断面（北から）

写真21　Ｎ地点土層断面（北西から）

写真22　Ｓ地点土層断面（南東から）

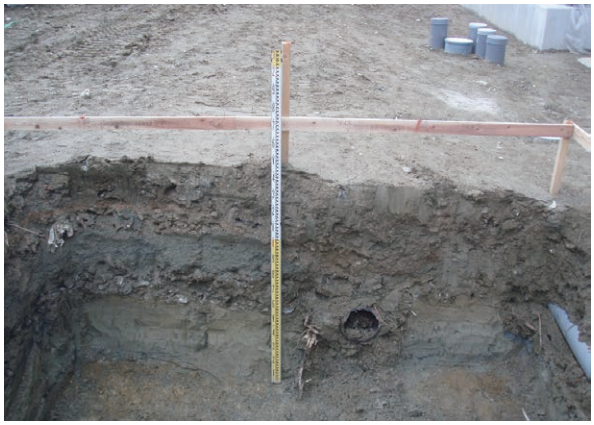


写真23　Ｕ地点土層断面（東から）

写真24　Ｖ地点土層断面（南から）

写真25　Ｗ地点土層断面（西から）

（4）遺物（図10、写真26・27）

1～9はC調査区SX1出土土器で、いずれも弥生時代中期後半の土器である。1は壺の口縁部である。口唇部上端を刻み、内面には貼付突帯の剥離痕がみられる。外面の剥落が激しいため確認できないが、垂下部が存在した可能性がある。2は須玖系広口壺の口縁部である。3は垂下口縁壺の胴部で胴部にM字状の貼付突帯を持つ。4～6は跳ね上げ口縁の甕口縁部である。7は壺の底部である。内面は剥落している。8・9は甕の底部でいずれも外面が張り出す。

10はN地点黒褐色シルト出土土器で、弥生時代後期後半～終末期の高坏である。外面に2条沈線、その直下に2孔一対の穿孔を施す。

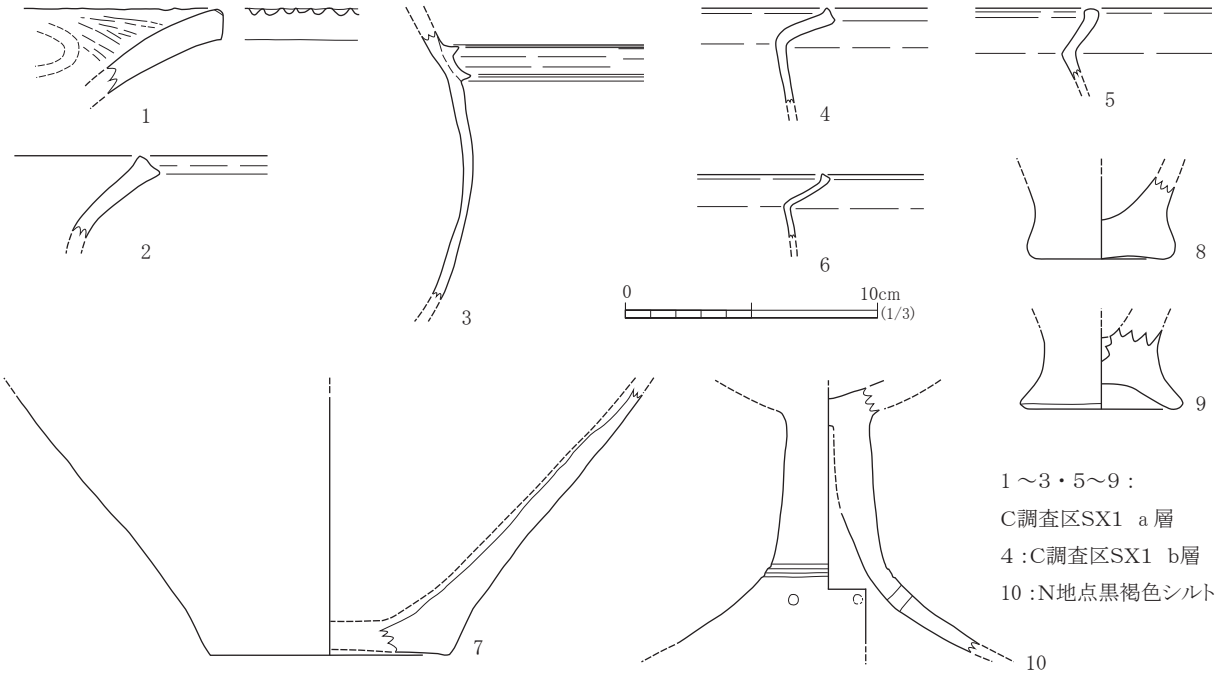


図 10 出土遺物実測図

C調査区ＳＸ１ a 層

C調査区ＳＸ１ a 層

C調査区ＳＸ１ a 層

C調査区ＳＸ１ a 層

C調査区ＳＸ１ b 層

C調査区ＳＸ１ a 層

写真 26 出土遺物①

Ｃ調査区ＳＸ１　ａ層

Ｃ調査区ＳＸ１　ａ層

Ｃ調査区ＳＸ１　ａ層

Ｃ調査区ＳＸ１　ａ層

Ｎ地点黒褐色シルト

写真 27　出土遺物②

表2 出土遺物(土器)観察表

法量(　)は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	C調査区 SX1　a層	弥生土器　壺	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	0.1～6mmの砂粒を含む	
2	C調査区 SX1　a層	弥生土器　壺	口縁部		①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1～2mmの砂粒を含む	
3	C調査区 SX1　a層	弥生土器　壺	胴部		①灰色(5Y5/1) ②浅黄橙色(10YR8/3)	0.1～3mmの砂粒を含む	
4	C調査区 SX1　b層	弥生土器　甕	口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1～2mmの砂粒を含む	
5	C調査区 SX1　a層	弥生土器　甕	口縁部		①②にぶい黄橙色(10YR 7/3)	0.1～2mmの砂粒を含む	
6	C調査区 SX1　a層	弥生土器　甕	口縁部		①灰代色(10YR8/2) ②灰色(5Y6/1)	0.1～2mmの砂粒を含む	
7	C調査区 SX1　a層	弥生土器　壺	底部	②5.9	①灰色(5Y4/1) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1～4mmの砂粒を含む	
8	C調査区 SX1　a層	弥生土器　甕	底部	②(6.5)	①②灰黄褐色(10YR6/2)	0.1～3mmの砂粒を含む	
9	C調査区 SX1　a層	弥生土器　甕	底部	②(9.5)	①淡橙色(5YR8/4) ②明赤褐色(5Y5/6)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
10	N地点 黒褐色シルト	弥生土器　高坏	坏部～脚部		①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1～7mmの砂粒を含む	

（5）小結

今回の調査の結果、建物北側の調査区では、I地点を除き顕著な遺構・遺物がみられなかったことから、昨年度の調査区[註1]同様、遺構が比較的希薄な地域と考えられる。一方、建物南側ではC調査区のほか、L・M・N・S地点で黒褐色シルトを検出し、M・N地点では弥生土器片が出土した。同層は遺物包含層もしくは遺構埋土とみられる。また、V地点では同層を埋土とする落ち込みを検出した。

L・M地点で確認された黒褐色シルトはC調査区で確認されたSX1の延長部分である可能性がある。C調査区・L・M地点周辺では、教育学部H－19区[註2]（現：共用棟B）の発掘調査、ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査[註3]、グランド照明施設新営工事に伴う発掘調査[註4]、遺跡保存公園の発掘調査[註5]で弥生時代中期～古墳時代前期の集落遺構が検出されている。

筆者の土器編年観では、共用棟B敷地で検出された遺構はいずれも弥生時代後期前半とみられる。一方、ラグビー場防球ネットに伴う発掘調査で検出されたSD1は環濠である可能性があり、弥生時代中期後半から後期前半の土器が出土している。C調査区SX1は人為的に掘削された遺構ではない可能性が高いが、中期後半の集落関連遺構が周辺一帯に存在していたと推測でき、今後の解明が期待される。

なお、平成22年度第4回埋蔵文化財資料館専門委員会（7月27日開催）で調査結果を審議した結果、C調査区で設置が計画された外灯については、関係部局の配慮により、設置場所を既存の外灯が設置されている場所に変更することになったため、C調査区で検出された遺構は保護されることになった。

【註】

1）田畑直彦（2013）「第1章第2節3　教育学部A棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成21年度－』，山口

2）河村吉行（1982）「第3章第2節　教育学部構内H－19区の発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』，山口

3）磯部貴文・河村吉行（1985）「第3章　吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』，山口

4）豆谷和之・田畑直彦（2000）「第2章　吉田構内グランド照明施設新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』，山口

5）河村吉行（1986）「付篇Ⅰ山口大学吉田構内保存地区の発掘調査（昭和57年度）」　山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』，山口

河村吉行（1987）「付篇Ⅰ山口大学吉田構内保存地区の発掘調査（昭和59年度）」　山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』，山口

河村吉行（1990）「付篇Ⅰ山口大学吉田構内保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」　山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』，山口

河村吉行（1991）「付篇Ⅱ山口大学吉田構内保存地区の発掘調査（総括）」　山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』，山口

2．音楽サークル棟新営工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区　吉田構内G-14区

調査面積　約13.5㎡（予備発掘調査約12㎡、立会調査約1.5㎡）

調査期間　平成22年12月20～24日
平成23年2月4日

調査担当　田畑直彦・松浦暢昌

調査結果

（1）調査の経緯

音楽サークル棟（音楽サークル棟B 軽量鉄骨構造：プレハブ）の新営工事決定に伴い、平成22年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会（10月19日開催　メール審議）において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、予定地の地下の状況が不明確なため、予備発掘調査・立会調査を実施することになった。

予定地は第2武道場の西側に位置し、平成22年12月まで仮設駐車場として利用されていた。計画建物の平面規模は東西約9m、南北約11mで、基礎工事では現地表下約60㎝までの掘削、設備工事では現地表下約70～100㎝の掘削が計画された。今回の予備発掘調査では、新営建物敷地内に2箇所の調査区（A・B調査区）を設定し、雨水枡設置箇所（C地点）では立会調査を実施した。

図11 調査区位置図

写真28 調査前全景（南から）

（2）A・B調査区（図11～13、写真28～32）

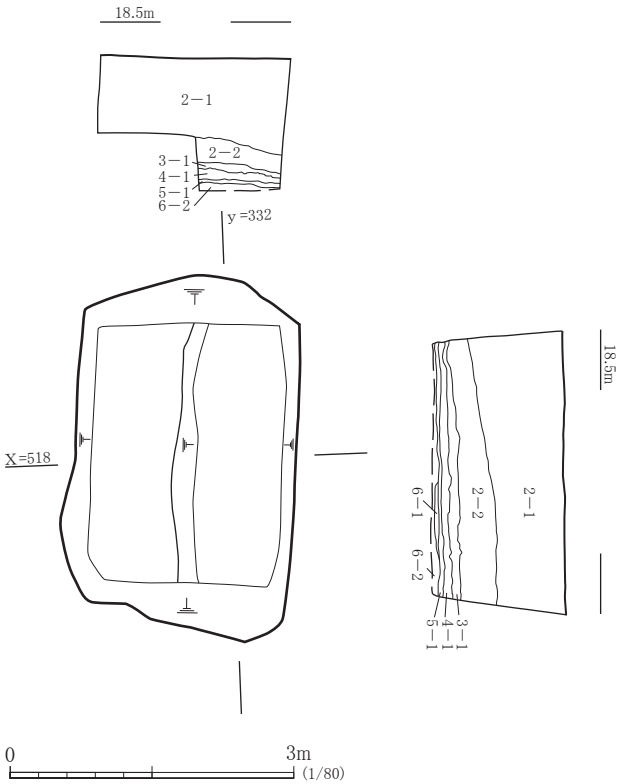
a.基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層：バラス（約10㎝）※調査区周辺では崩落防止のため除去
第2層：造成土（ガレキを多量に含む：約80～90㎝）
第3層：旧耕土（層厚約7㎝）
第4層：旧床土（層厚約20～25㎝）
第5層：遺物包含層か（層厚約8～30㎝）
第6層：地山（弥生時代以降の遺構面形成層で縄文時代以前の河川堆積土）

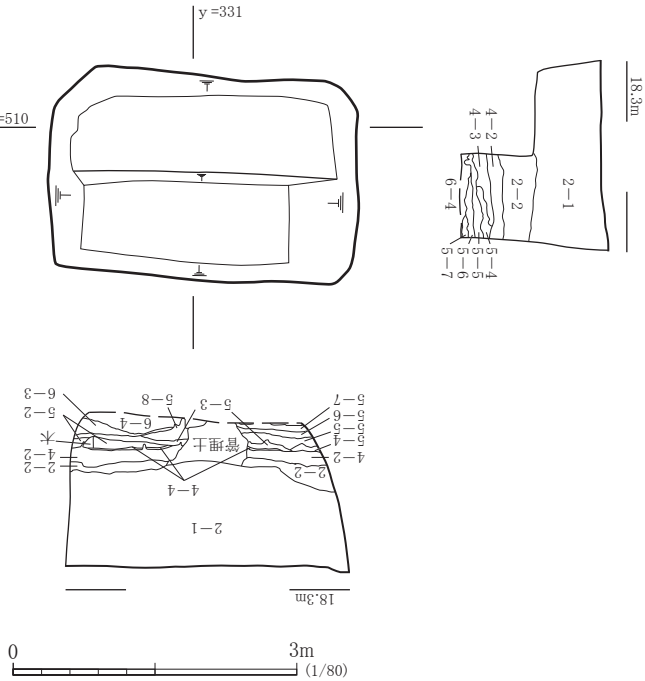
A調査区の層序は、現地表下約126㎝までが第2層で、以下、約126～133㎝で第3層、約133～146㎝で第4層、約146～148㎝で第5層、約146㎝、標高17.49m以下が第6層であった。第5層は遺物包含層と考えられるが、層厚2㎝程度と薄く、遺物は出土しなかった。

B調査区の層序は、現地表下約90㎝までが第2層で、以下、約90～105㎝で第4層、約105～157㎝で第5層を検出した。一方、調査区南西部では第5層を現地表下約120～136㎝で検出した。第5層は5－



2－1　造成土 灰オリーブ色（7.5Y4/2)土　旧耕土？灰色
(N4/0) シルト・弥生時代遺構の遺構面形成
層である明オリーブ灰色（2.5GY7/1)シルト、
橙色（5YR7/6）粘土、～10cm大礫・瓦礫を含む
2－2　造成土　マサ土
3－1　旧耕土　暗オリーブ灰色（5GY3/1)シルト
4－1　旧床土　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1)シルト
5－1　遺物包含層か　灰色（5Y4/1）シルト
6－1　地山　オリーブ灰色（2.5GY4/1)シルト　～１cm大礫含む
6－2　地山　灰オリーブ色（7.5Y4/2)シルト

図 12　A調査区平面図・断面図



2－1　造成土 灰オリーブ色（7.5Y4/2)土　旧耕土？灰色
(N4/0) シルト・弥生時代遺構の遺構面形成
層である明オリーブ灰色（2.5GY7/1)シルト、
橙色（5YR7/6）粘土、～10cm大礫・瓦礫を含む
2－2　造成土　マサ土
4－2　旧床土　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1)シルト
4－3　旧床土　暗オリーブ灰色（2.5GY5/1)シルト
4－4　旧床土　灰オリーブ色（7.5Y6/2)シルト
5－2　遺物包含層か　灰色（5Y3/1）粘質土
5－3　遺物包含層か　灰色（5Y4/1）粘質土
5－4　遺物包含層か　灰色（N4/0）粘質土
5－5　遺物包含層　灰色（N5/0）粘質土
5－6　遺物包含層　灰色（N4/0）粘質土　炭を含む
5－7　遺物包含層か　灰色（N6/0）粘質土
5－8　遺物包含層か　5－5と同じ
6－3　地山　灰色（10Y5/1)粗砂　～3cm大礫含む
6－4　地山　オリーブ灰色（5Y4/2)シルト

図 13　B調査区平面図・断面図

写真29　Ａ調査区全景（南西から）

写真30　Ｂ調査区全景（北から）

写真31　Ｂ調査区南壁土層断面（北から）

写真32　Ｃ地点土層断面（南西から）

２～８層に細分されるが、このうち、５－５層・５－６層からは摩滅した時期不明の土器片が各１点出土した。同層は堆積状況から河川もしくは落ち込みの堆積土である可能性がある。

b.遺構

Ａ・Ｂ調査区で遺構は皆無であった。

（3）Ｃ地点（図11・写真32）

現地表下から約100㎝まで掘削を行ったが、全て造成土であり、埋蔵文化財に支障はなかった。

（4）小結

今回工事の掘削深度は大部分が現地表下約60㎝以内にとどまる。このため、予定地内における埋蔵文化財に支障はない。Ａ・Ｂ調査区では第５層を検出し、Ｂ調査区からは摩滅した時期不明の土器片が含まれることを確認した。第５層は遺物包含層であるが、時期や分布状況は不明である。このため、今後も調査区周辺においては、埋蔵文化財の保護に引き続き注意が必要である。

3．教育学部研究実験棟G棟改修工事に伴う立会調査

図14　調査区位置図

写真33　Ｃ地点土層断面（南から）

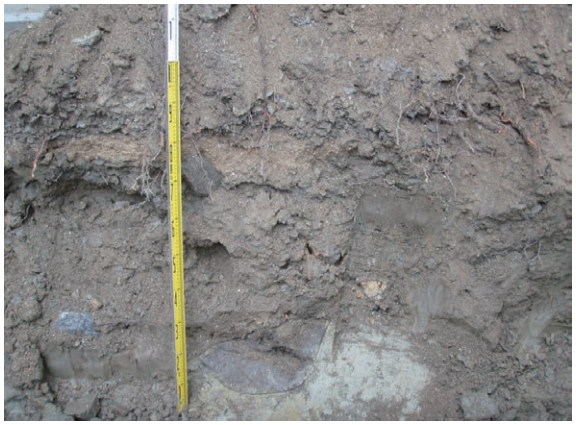


写真34　Ｄ地点土層断面（南から）

調査地区　吉田構内J-18区

調査面積　約22㎡

調査期間　平成22年5月6・11日

調査担当　田畑直彦

調査結果　平成21年11月に吉田構内の教育学部G棟改修工事が計画されたことを受け、管轄自治体の指導の下、当館館長、副館長、館員の協議により、立会調査を実施することになった。工事は排水管の掘削に伴うものである。

Ａ地点は現地表下約50㎝までが造成土で、約50～60㎝が旧水田床土、約60～73㎝が黒褐色（10YR 3/1)シルト、約73～115㎝が弥生時代以降の遺構面形成層である明オリーブ灰色（2.5GY7/1)シルト、約115～125㎝が青灰色（5BG6/1）シルトであった。黒褐色シルトには幅約20㎝、深さ約9㎝で落ち込んだ箇所があり、何らかの遺構である可能性がある。遺物は出土しなかった。B地点は現地表下約60㎝までが造成土で、約60～80㎝が旧水田耕土、約80～100㎝が弥生時代以降の遺構面形成層である明オリーブ灰色（2.5GY7/1）シルトであった。遺構・遺物は検出していない。C・D地点は撹乱が激しく、現地表下約60～70㎝までが造成土で、約70～100㎝が弥生時代以降の遺構面形成層である明オリーブ灰色（2.5GY7/1)シルトであった。同シルトを検出面としてＣ地点ではピット２基、Ｄ地点ではピット１基を検出した。ピットの直径は35～40㎝、深さは11～22㎝である。埋土は黒褐色（10YR3/1）シルト、灰色（10YR5/1）シルトであった。いずれのピットからも遺物は出土していないため、時期は不明である。

Ｃ・Ｄ地点周辺は撹乱が著しいものの、遺構が残存している可能性が高いため、今後の開発工事においては、埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

4. 吉田寮改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内L・M-9区

調査面積　約1,820㎡

調査期間　平成22年7月27日、10月5日

調査担当　横山成己

調査結果　吉田構内北端部に位置する吉田寮（男子学生寮）改修工事の内、地下の掘削を伴う2箇所において立会調査を実施した。

A地点は、寮改修に伴う電柱新設工事箇所である。工事ではボーリングにより2mの深度まで掘削が行われた。断面精査は行えなかったが、目視する限り現地表より01.mが表土、1.9mまでが造成土、以下に明黄色粘土が確認された（写真35）。最下層は地山と思われるが造成土の可能性もある。

B地点は吉田寮改修機械設備工事で、自動車部の車庫廻り給排水管工事に伴う掘削部である。車庫の南西隣接地に長さ2.5m、幅1.75mの規模で2mの掘削が行われた。基本層序は現地表下0.2mが表土、1mまでが造成土である。以下に①黒色粘質土（層厚0.1m）、②暗灰色粘質土（層厚0.05～0.1m）、③黄灰色粘質土（層厚0.3m）、④黄灰色砂礫土（層厚0.1～0.2m）、⑤黒褐色粘質土（層厚0.1m）、⑥灰黄色粘土（層厚0.3m以上）が確認された（写真36）。この内①②層は大学造成前の旧耕土・床土と見られ、③～⑤は自然堆積層、⑥層が地山と思われる。また、この自然堆積層への掘り込みも確認された。掘り込み埋土は暗灰褐色粘質土。断面精査を行ったが、埋土中に遺物は確認されなかった。

当地は南東に隣接する吉田寮敷地から一段下がった場所に当たり、過去に埋蔵文化財調査歴のない地域である。今後も大規模開発は予定されていないが、設備関係工事等により土地の掘削が行われる場合は工事立会を実施し、地下情報を蓄積する必要があろう。

この他、吉田寮周域において広範囲に現地表のすき取り工事が実施されたが、掘削深度が浅く、埋蔵文化財に支障は生じていない。

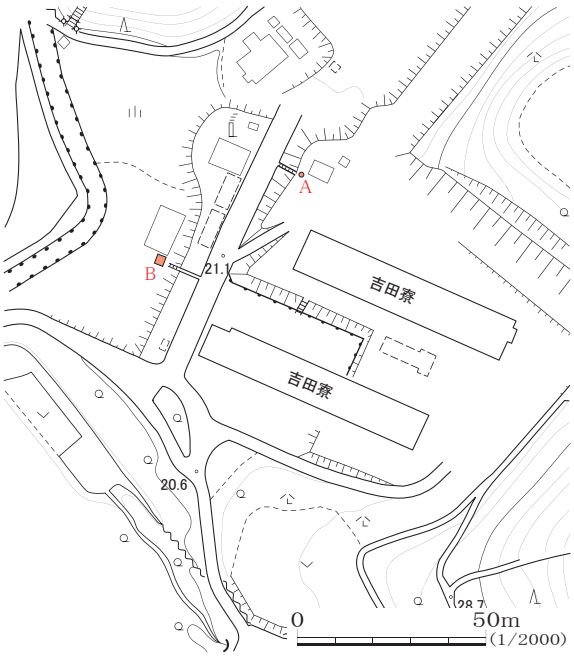


図15　調査区位置図

写真35 A地点土層断面（東から）

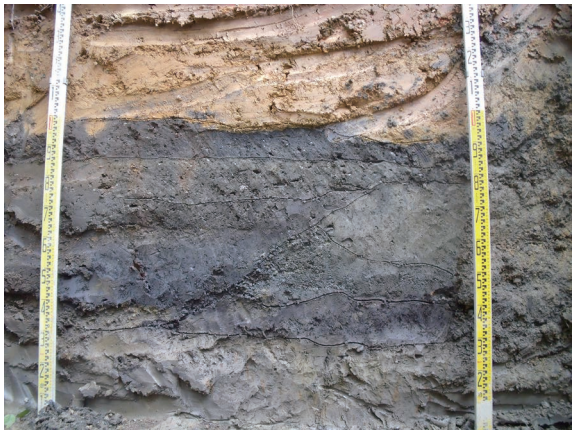


写真36 B地点土層断面（北西から）

5．基幹整備（鋳鉄管改修）工事に伴う立会調査

図 16　調査区位置図

写真 37　B 地点土層断面（南から）

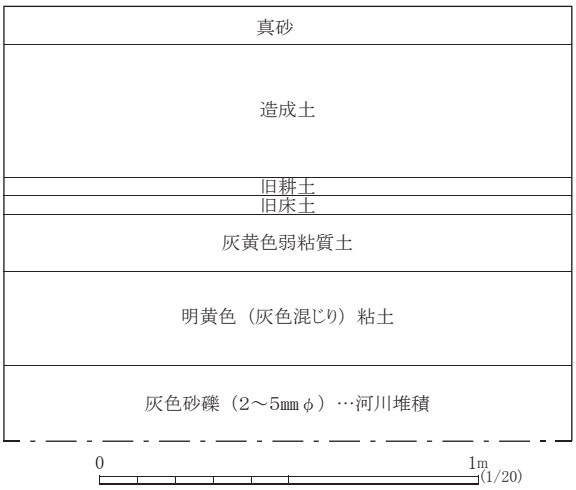


図 17　B 地点土層断面柱状図

調査地区　吉田構内Q-18区

調査面積　13.6㎡

調査期間　平成22年8月18日

調査担当　横山成己

調査結果　吉田構内南端部、椹野寮（女子学生寮）と人文学部校舎間において老朽化したガス管の改修工事が計画された。工事計画の大部分は既存のガス管を改修するものであったが、一部に新規配管ルートが存在するため、工事中の立会調査を実施することとなった。

調査実施箇所は、人文学部棟東側空閑地から道路にかけてのルートである。調査区東端部のA地点では、現地表下70㎝の造成土下に河川堆積土を確認した。

西端部のB地点では、上より表土（層厚10㎝）、造成土（層厚35㎝）、旧耕土（層厚5㎝）、旧床土（層厚5㎝）、灰黄色弱粘質土（層厚15㎝）、明黄色灰色粘土（層厚25㎝）、灰色砂礫（河川堆積土：層厚20㎝）を確認した（写真37、図17）。

調査地周辺の既往調査では、明確な遺構等埋蔵文化財は確認されていないが、吉田構内では今回検出された明黄色粘土層に遺構が検出される場合が多いため、調査地周囲に遺構が遺存する可能性を指摘できる。周辺地での工事においては今後とも慎重な対応が求められる。

6．基幹環境整備（第1体育館周辺排水整備）工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内G-13区

調査面積　8㎡

調査期間　平成23年2月1日

調査担当　横山成己

調査結果　当工事計画の最終年に当たる平成22年度は、吉田構内北東部、廃棄物倉庫の南西隣空閑地において、九田川に排水管を接続する工事が計画された。

計画地は過去において九田川の氾濫原であったと推測されるが、予定掘削深度が1.6mに達することから、慎重を期し工事立会を実施することとなった。

立会は工事掘削終了後に行った。土層断面を精査したところ、現地表下1.45mまでが造成土であり、下に旧耕土と見られる層厚0.15m以上の暗灰色粘質土を確認した（写真38、図19）。

吉田構内は、北西部から西部にかけて沖積平地が形成されており、大学統合移転前は広大な耕作地であった。大学造成時、北東部から東部、南東部の丘陵地は主として削平され、北西部から西部にかけての沖積平地は主として盛土が施されたと見られるが、沖積平地に確認される旧耕土は場所により検出深度が不均一である。これは低地に向かい棚田状に水田が形成されていたためと考えられる。工事立会では埋蔵文化財は確認されなかったが、移転前の周辺地形を推測する上では貴重な知見を得ることができた。

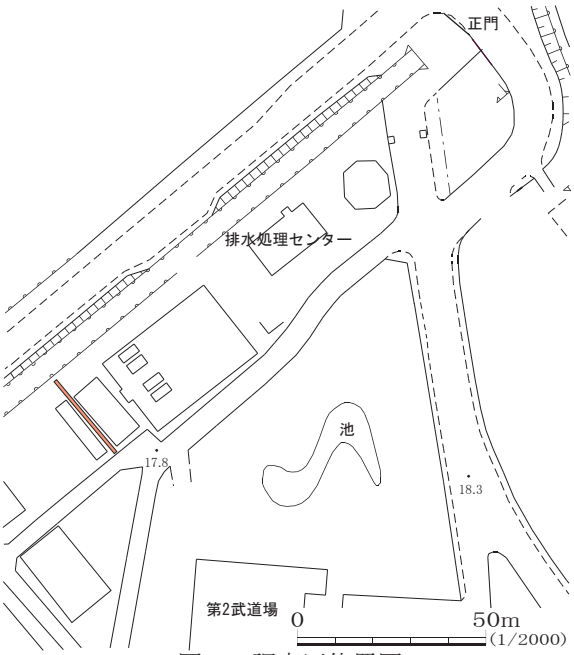


図 18　調査区位置図

写真 38　土層断面（南から）

図 19　土層断面柱状図

7. 事務局2号館車寄せ取設工事に伴う立会調査

図 20　調査区位置図

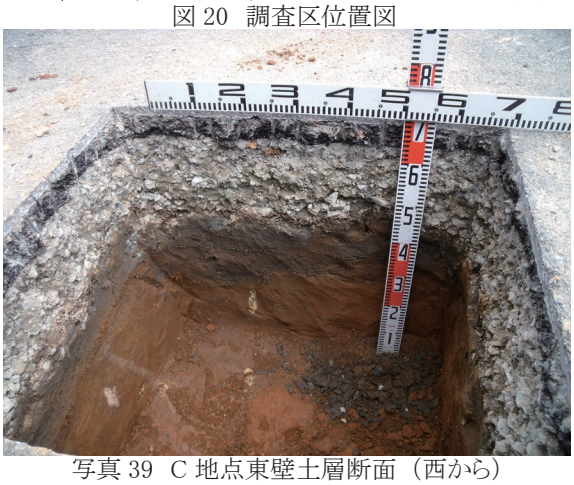


写真 39　C 地点東壁土層断面（西から）

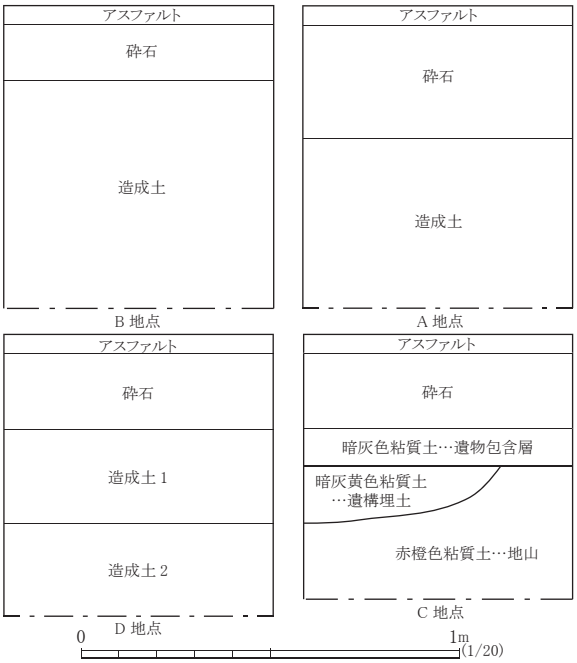


図 21　土層断面柱状図

調査地区　吉田構内L-14区

調査面積　3.6㎡

調査期間　平成22年9月1日

調査担当　横山成己

調査結果　吉田構内事務局2号館南面におけるカーポート設置計画が立案された。地下の掘削に関しては、カーポート支柱基礎部分のみ約80㎝の掘削を行うという小規模な工事内容であったが、本部2号館敷地においては区画溝や屋敷墓を有する中世屋敷跡、弥生時代後期後半から終末期の遺物が多量に出土した土壙等が検出されており[註1]、東に隣接する遺跡保存地区[註2]、北東に近接する大学会館敷地[註3]からも密に遺構等が検出されていることから、工事掘削後の立会調査を実施することとなった。

支柱4ヶ所（A～D地点）の内、A・B・D地点は造成土内の掘削で止まったが、C地点では現地表下0.35mで遺物包含層と推察される厚さ0.1mの堆積層が確認され、その直下に赤橙色粘土の地山が検出された。また、北壁から西壁の土層断面を精査したところ、土壙と見られる落ち込みが検出された（写真39、図21）。埋土は暗灰黄色粘質土である。土層断面や排土中に遺物は確認できなかったことから所属時期は不明とせざるを得ないが、今後とも周辺域での工事には注意を要することが確認された。

【註】

1）河村吉行（1979）「付篇2　吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』,山口

2）河村吉行・森田孝一・杉原和惠（1986）「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』,山口

3）河村吉行ほか（1985）「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

8. 里山遊歩道手摺り取設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内N・O-11区

調査面積　15.2㎡

調査期間　平成22年8月30日

調査担当　横山成己

調査結果　平成21年度に吉田構内北東部に位置する低丘陵、通称「もり山」頂部にモニュメント・東屋・石彫方位盤等を設置し、「共育の丘」として活用することが決定されたことを受け、昨年度中に予備発掘調査を実施した[註1]。その結果、顕著な埋蔵文化財は遺存しないことが確認されたが、もり山南東斜面には現在も横穴墓1基が残存しており、谷を一つはさみ北西に隣接する低丘陵南東斜面には日吉神社横穴墓群が存在することから、周辺地の開発工事等においては今後とも埋蔵文化財保護に留意すべきとの意見が提示された。

平成22年度は、「共育の丘」に至る遊歩道の整備の一環として、手摺り取設工事が計画された。地下の掘削は手摺り基礎部分のみであり、基礎も0.85m角、深度0.6mと狭小なものであったが、21箇所に設置とのことであったため、慎重を期し工事立会を実施する運びとなった。工事掘削終了後に調査を行ったが、いずれの基礎坑も約0.1mの表土下は明褐色岩盤風化土の地山であり、遺構等埋蔵文化財は確認されなかった（写真40・41）。

「共育の丘」周辺はこの度の開発計画に伴い伐採が進み、比較的地表面の観察が容易な環境となっている。今後踏査を実施し、さらなる横穴墓の確認に努めたい。

【註】

1）田畑直彦（2013）「里山整備工事に伴う予備発掘調査・立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成21年度－』,山口

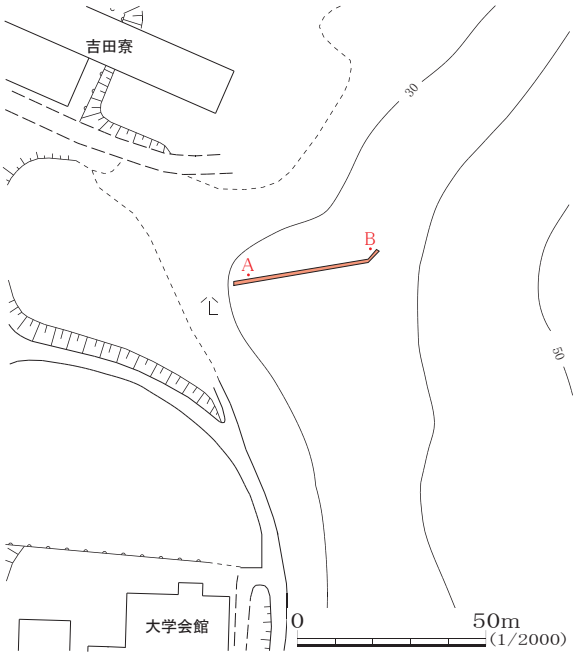


図 22　調査区位置図

写真 40　工事の模様（西から）

写真 41　B 地点土層断面（南東から）

9. 人文学部駐輪場外灯設置工事に伴う立会調査

図 23　調査区位置図

写真 42　土層断面（北から）

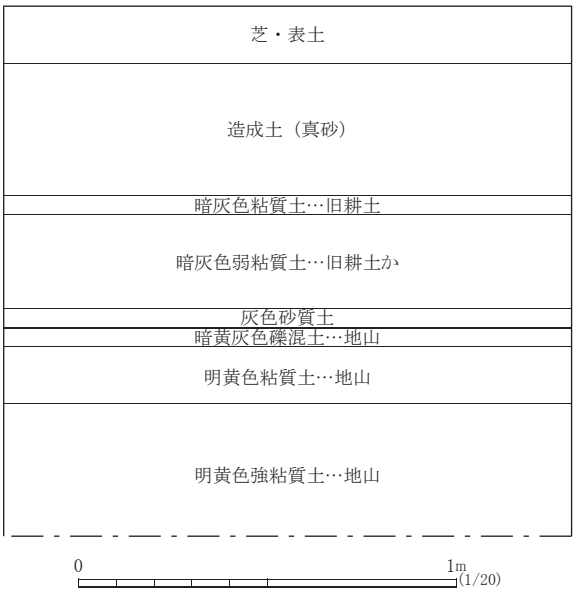


図 24　土層断面柱状図

調査地区　吉田構内M-22区

調査面積　13.6㎡

調査期間　平成23年3月16日

調査担当　横山成己

調査結果　吉田構内南部に位置する人文学部校舎と国際交流会館1号館の間に設置されている駐輪場に該当の設置工事が計画された。

昭和53年度に実施された人文学部校舎新営に伴う試掘調査[註1]においては顕著な埋蔵文化財は確認されなかったが、昭和61年度に実施された国際交流会館新営に伴う発掘調査[註2]では、敷地の南半部で東から西に走向する弥生時代から古墳時代にかけての自然河川が確認されている。

今回の工事計画では、電線埋設工事は掘削深度が浅いため調査対象から除外し、外灯基礎部分（1m角、深度1.4m）のみを対象とした。

確認された層序は、①芝・表土（層厚0.15m）、②造成土（層厚0.35m）、③暗灰色粘質土（層厚0.05m）、④暗灰色弱粘質土（層厚0.25m）、⑤灰色砂質土（層厚0.05m）、⑥暗黄褐色礫混土（層厚0.05m）、⑦明黄色粘質土（層厚0.15m）、⑧明黄色強粘質土（層厚0.35m以上）である（写真42、図24）。この内、③は本学統合移転前の旧耕土、④も耕土と見られる。⑤層以下は地山であろう。

今回の調査により、人文学部校舎の南方、国際交流会館1号館までの空閑地に埋蔵文化財が分布する可能性は低下した。調査地は現在椹野寮（女子学生寮）が立地する舌状丘陵が耕地化に伴い削平された可能性がある。今後周辺地の調査から検討を行う必要がある。

【註】

1）河村吉行（1992）「付篇Ⅰ　吉田構内人文学部校舎新営に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』,山口

2）河村吉行（1987）「吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』,山口

10. 教育学部附属特別支援学校雨水排水補修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内C・D-21区

調査面積　約18㎡

調査期間　平成22年8月9日

調査担当　横山成己

調査結果　教育学部より、附属特別支援学校では大雨時に雨水がロータリ付近にたまるため、雨水枡を新設するとともに雨水の排水ルートのための管を埋める工事の事業計画が提出された。工事においては深さ1m、幅1.5m程度で直近の側溝まで掘削する予定であった。

特別支援学校は、吉田構内の西端部に位置している。学校新営前の昭和54年、用地内の埋蔵文化財の有無および分布範囲の把握のため、山口市教育委員会により試掘調査が行われた。調査は用地内110箇所にて実施され、その結果敷地の東部（A地区）、北西部（B地区）、南東部（C地区）の3地区で遺構および遺物包含層が検出された[註1]。今回の工事計画地はA地区に近接する場所に該当するため、工事中の立会調査で対応することとなった。

調査の結果、排水管ルートでは掘削は造成土内でとどまったが、調査区南西端部の枡設置部分では、現地表下60㎝の造成土下に遺物包含層と思われる黒褐色砂質土、その下位に灰色砂礫の河川堆積土を確認した（写真43、図26）。土層断面および排土から遺物は確認されていないが、今後周辺域での開発には注意が必要である。

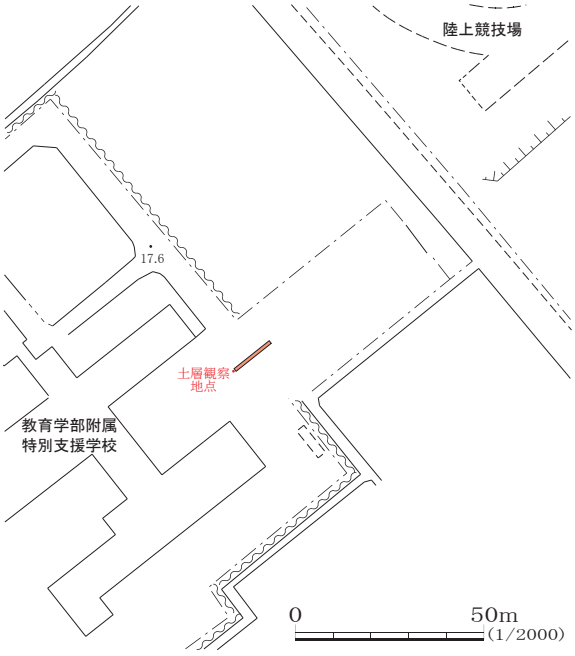


図 25　調査区位置図

写真 43　土層断面（東から）

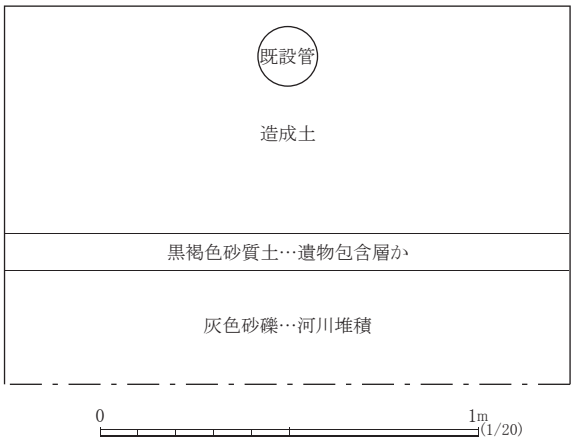


図 26　土層断面柱状図

【註】

1）河村吉行（1991）「付篇Ⅰ　吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』,山口

11. 農学部附属農場果樹園側溝新設工事に伴う立会調査

図27　調査区位置図

写真44　遺構検出状況（西から）

写真45　調査区全景（東から）

調査地区　吉田構内R・S-19区

調査面積　約10㎡

調査期間　平成23年3月14日

調査担当　横山成己　松浦暢昌

調査結果

（1）調査の経緯（図27）

農学部より、附属農場果樹園南端部、解剖実習棟との境界部に全長25mの側溝を新設する工事計画が提出された。掘削予定深度は桝設置部以外は現地表下0.4mに止まるものであったが、南に隣接する解剖実習棟敷地では古代を中心とする遺構群が確認されており、敷地北端部では地下0.3～0.4mで遺物包含層が検出されたとの所見があり[註1]、西に隣接する総合研究棟敷地では古代の遺物を包含する旧河川が確認されており[註2]、さらに近年実施した近隣地での立会調査においても、地下0.4m地点で柱穴と見られる遺構が確認されている[註3]ため、工事中の立会調査が必要と判断した。

【註】

1）a：田畑直彦（2002）「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報－」，山口考古学会（編）『山口考古』第22号、山口

b：田畑直彦（2004）「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

2）田畑直彦（2004）「平成12年度山口大学構内遺跡調査の概要」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

3）横山成己（2011）「農学部附属農場内電源敷設工事に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』，山口

（2）調査の経過

工事掘削は年度末の3月14日に実施され、掘削終了後に立会調査を行った。掘削面に遺構埋土と見られる箇所が複数確認されたため、平面精査を行うと同時に、桝が設置される東端部・西端部の断

面精査を行った。

（3）基本層序（図29、写真46・47）

その結果、当地の基本層序は①耕土、②灰褐色弱粘質土、③黄褐色岩盤風化土（粘土ブロック混ざる）、④明黄褐色岩盤風化土（礫砂混じり）であることが確認された。この内、②は遺物包含層である可能性があり、③・④層は地山である。遺構は③を掘り込み形成されている。なお、③上面は調査区東端部では現地表下20㎝、西端部では40㎝で確認された。

（4）遺構（図28、写真44・45）

検出された遺構には、ピット3基（Pit1～3）、土壙5基（SK1～5）、溝3条（SD1～3）がある。これらは埋土の土質により2種に大別される。即ち、灰褐色の埋土を有するもの（SD1～3、Pit1～3）と、黒褐色の埋土を有するもの（SK1～5）である。この内、SK4がSD2を切り込んでおり、先後関係は明白である。近隣地における既往の調査成果により、灰褐色埋土が中世、黒褐色埋土が近世以降と推察される。

溝は何れも南北に走向しており、SD1とSD3は幅0.3m程度、SD2はやや幅広で約0.7mを測る。ピットはいずれも平面円形で、径0.2～0.3mを測る。土壙は2mの間隔で東西方向に並んでおり、SK5のみが平面円形、残りは平面方形である。SK1～4はほぼ同一規模で、一辺0.35～0.4mを測る。SK5は検出された範囲では径0.4mを測る。

（5）遺物

断面精査中に基本層序②より須恵器片1点が確認されたに過ぎない。壷類の体部片と見られるが、小片のためここでは図示しない。

（6）小結

今回立会調査を実施した地点は、平成20年度に動物医療センター北側にて確認した中世集落跡[註1]の約70m西方に当たる。平成20年度確認集落跡は、出土遺物から14世紀中に出現し、16世紀中に消滅したと推定される。時代は降るが18世紀前半から中頃に作成された『地下上申絵図　吉田村清図』（山口県文書館所蔵）においても該当地に集落は描かれておらず、この推定を補強するものとなっている。筆者はこの集落は比較的小規模なもので、近世に農地の拡大により構内大学会館周辺もしくは農学部附属農場本館周辺に中世に形成され、近世まで継続した集落に統合されたと推察していたが、今回の調査により当集落が少なくとも東西120mの範囲まで広がる可能性が高まったことから、再考の余地があると考える。今後、吉田遺跡のみならず隣接する遺跡との関係を検討したい。

なお、今回の調査では遺構掘削は行なっておらず、遺構分布の平板測量による記録を作成し、工事業者に慎重な埋め戻しを指示した上で調査を終了している。今後も周辺地の開発工事等には十分な注意が必要である。

【註】

1）横山成己（2012）「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報』,山口

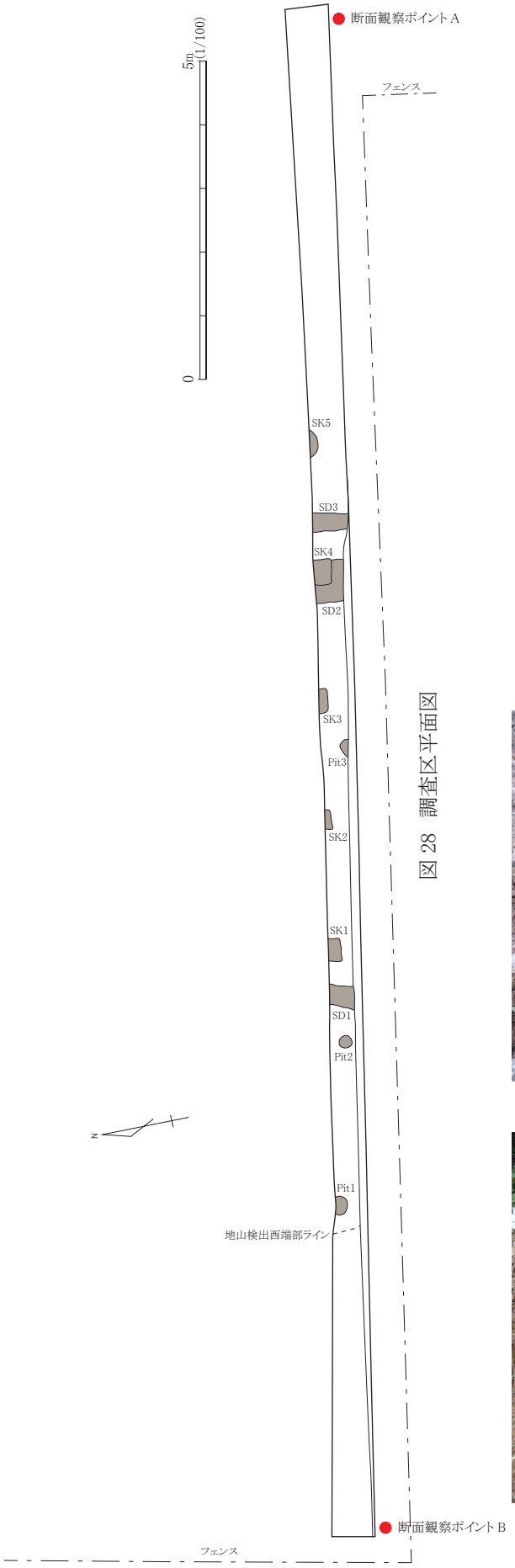


図 28　調査区平面図

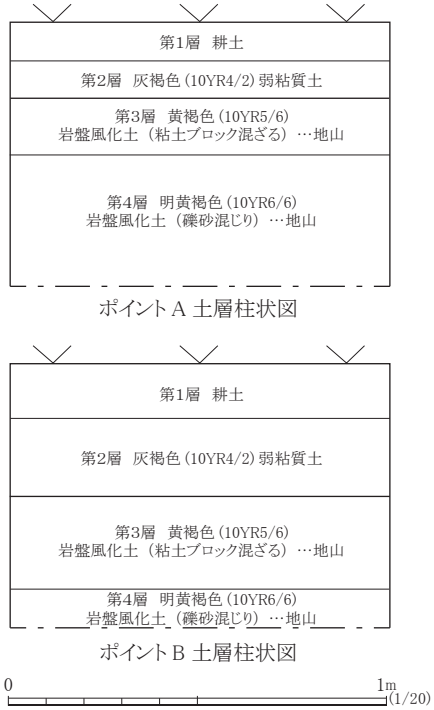


図 29　土層断面柱状図

写真 46　ポイントA 土層断面（北から）

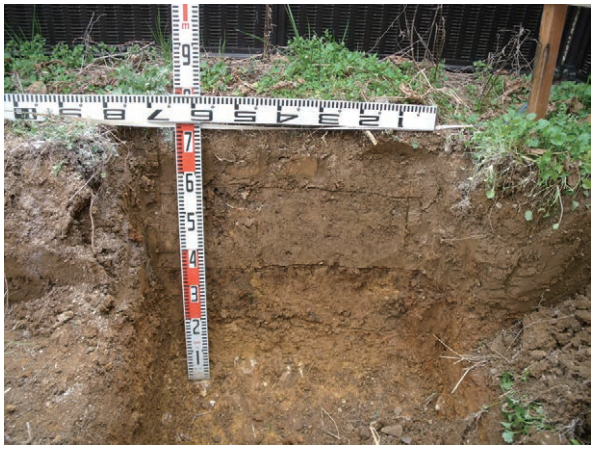


写真 47　ポイントB 土層断面（北から）